

学校教育におけるAI活用に関する これまでの取組と今後の方向性

2026年6月30日

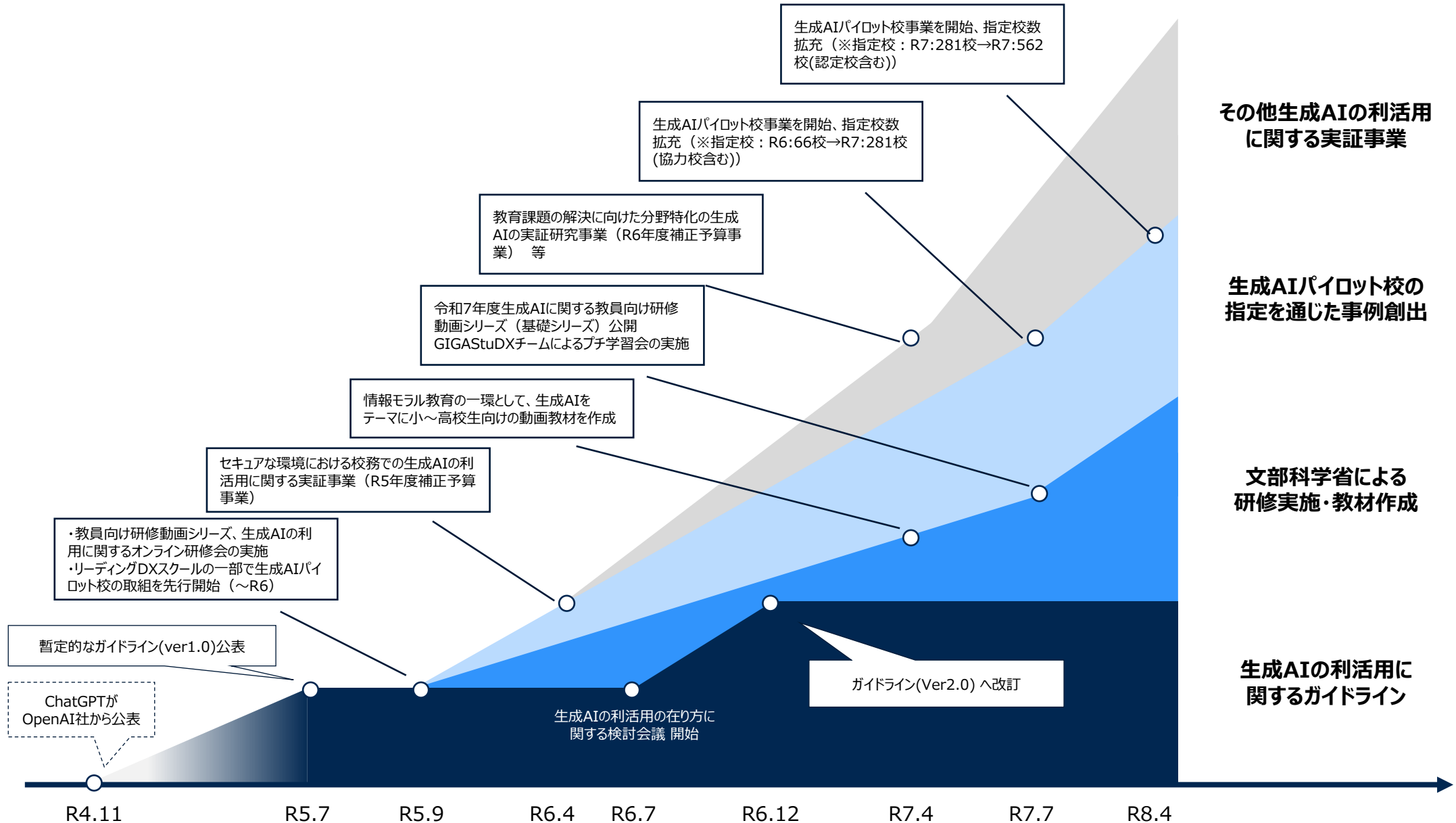
中央教育審議会初等中等教育分科会デジタル学習基盤特別委員会
初等中等教育局 参事官（デジタル学習基盤担当）

1

これまでの生成AIに関する取組

生成AIの利活用に関する文部科学省のこれまでの取組

生成AIはこの数年で急速に進化した先端技術であるが、様々なリスクも存在。
初等中等教育段階において生成AIの適切な利活用に向けて、ガイドライン策定など取組を実施。



教職員や教育委員会等の学校教育関係者を主たる読み手として、学校現場における生成AIの適切な利活用を実現するための参考資料となるよう、生成AIの概要や基本的な考え方、場面や主体に応じて押さえておくべきポイントをまとめたもの。令和5年7月に暫定的なガイドライン(Ver.1.0)を公表し、令和6年12月にガイドライン(Ver.2.0)へと改訂。

ガイドラインの構成

① はじめに（本ガイドラインの位置づけ及び構成）

① 生成 AI について

② 基本的な考え方

- 1 人間中心の生成AIの利活用
- 2 情報活用能力の育成強化

政府全体の議論
に合わせて内容や
考え方を整理



③ 学校現場において押さえておくべきポイント

- 教職員が校務で利活用する場面
- 児童生徒が学習活動で利活用する場面
- 教育委員会が押さえておくべきポイント

場面や主体に
応じて具体的な
ポイントを整理



ガイドライン参考資料

- 各場面や主体に応じたチェック項目
- 生成AIパイロット校における先行取組事例
- 学校現場で活用可能な研修教材 等

初等中等教育段階における
生成 AI の利活用に関するガイドライン

文部科学省 初等中等教育局

令和6年12月26日

Ver. 2.0

令和6年12月26日にVer.2.0公表



教職員や教育委員会等の学校教育関係者を主たる読み手として、学校現場における生成AIの適切な利活用を実現するための参考資料となるよう、生成AIの概要や基本的な考え方、場面や主体に応じて押さえておくべきポイントをまとめたもの。



1. 生成AIについて

生成AIの概要



- 生成AIとは、文章、画像、プログラム等を生成できるAIモデルにもとづくAIの総称
- 汎用的なサービスだけでなく、様々な提供形態・提供主体が出現し、教育分野にも導入
- 様々なリスクの存在が指摘される一方で、技術的な対策も進展

2. 基本的な考え方

人間中心の利活用



- 生成AIを有用な道具になり得るものと捉え、出力を参考の一つとして、リスクや懸念を踏まえた上で、最後は人間が判断し、責任を持つことが重要
- 学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味した上で利活用
- 学びの専門職としての教師の役割が一層重要

情報活用能力の育成強化



- 生成AIの仕組みの理解、学びに生かしていく視点、近い将来生成AIを使いこなすための力を、各教科等の中において意識的に育てていく姿勢は重要
- 生成AIが社会生活に組み込まれていくことを念頭に、情報モラルを含む情報活用能力の育成を一層充実させていくことが必要

3. 学校現場において押さえておくべきポイント

教職員が校務で利活用する場面



- 校務において利活用することで、校務の効率化や質の向上等、働き方改革につなげていくことが期待される
- 教職員自身が新たな技術に慣れ親しみ、利便性や懸念点を知っておくことは、児童生徒の学びをより高度化する観点からも重要
- 生成AIの仕組みや特徴を理解した上で、生成された内容の適切性を判断できる範囲内で積極的に利活用することは有用

児童生徒が学習活動で利活用する場面



- 発達の段階や情報活用能力の育成状況に留意しつつ、リスクや懸念に対策を講じた上で利活用を検討すべき。その際、学習指導要領に定める資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的を達成する観点から効果的であるかを吟味することが必要
- 「生成AI自体を学ぶ場面」、「使い方を学ぶ場面」、「各教科等の学びにおいて積極的に用いる場面」を組み合わせたり往還したりしながら、生成AIの仕組みへの理解や学びに生かす力を高める

教育委員会等が押さえておくべきポイント



- 教育委員会が主導して制度設計や方向性を示すことが重要
- 各学校の実態を十分に踏まえた柔軟な対応を講じる必要があることあり、一律に禁止・義務付けるなどの硬直的な運用は望ましくない
- 先行事例や教材・ノウハウの周知・共有、研修の実施により、生成AIの適切な利活用を推進する環境を整備することが必要

共通して押さえておくべきポイント



- 安全性を考慮した適正利用
- 公平性の確保
- 情報セキュリティの確保
- 透明性の確保、関係者への説明責任
- 個人情報・プライバシー
- 著作権の保護

参考資料編

- 各場面や主体に応じたチェック項目、生成AIパイロット校における先行取組事例、学校現場において活用可能な研修教材 等

令和8年度生成AIパイロット校の取組について

背景・課題

- 令和5年度よりリーディングDXスクール事業の一環として、**生成AIを教職員が校務において活用する実践例**や**児童生徒が学習場面で利活用する実践例**が全国から生まれてきており、令和8年度も引き続きその取組を一層深めていく必要がある。
- そのため、「**初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（令和6年12月26日）**」を遵守し、学校現場における生成AIの適切な利活用の実践事例を創出し、その**成果・課題の検証**、**好事例の創出・普及を行うこと**が必要である。併せて、次期学習指導要領の改訂を見据え、**AIを含む情報活用能力の育成に向けた教材の実践及び実証**を行うことが必要である。

取組内容

A区分：教育利用 10自治体

学習場面における生成AIの利活用事例創出

情報活用能力育成の一環として、生成AIを児童生徒の学習場面で活用する取り組みについて以下の場面で意識して実践を創出

- 生成AI自体を学ぶ場面
- 使い方を学ぶ場面
- 各教科の学びにおいて積極的に用いる場面

B区分：校務利用 100自治体

校務における生成AIの利活用事例創出

教職員の働き方改革の一環として、生成AIを日々の校務に活用し、業務改善を行う取り組み実践を創出

- 児童生徒の指導に関わる業務の支援
- 学校運営に関わる業務の支援
- 外部対応への支援 など

C区分：教材実証 51自治体

AIを含む情報活用能力の育成に向けた教材実証

- 指導要領改訂を見据え、別事業において開発するAIを含む情報活用能力育成に向けた教材の活用実証
- 各教科などにおける深い学び・情報活用能力育成の実践事例を創出（リーディングDXスクール事業の後継）

5つの機会

①キックオフ会議

- 有識者による基調講演
- パネルディスカッション

基調講演やパネルディスカッションを通して、1年間を通して各学校が探求する【問い】を考える場を提供

②夏季学習会

（※内容については令和7年度実績例）

- 有識者による基調講演
- アイデアソン、ワークショップ



対面イベントで実践を共有

③オンライン座談会

- パイロット校の横のつながりをつくる座談会

生成AIの利活用や情報活用能力の育成について、教員同士の悩みや実践を**共有する場**を作ることで、取組を進める教員・教育委員会をサポート

④全国キャラバン

- 生成AIの利活用を普及展開するための研修パッケージ体験

取組が一部の教員だけにとどまらないよう、普及展開に必要な研修パッケージを体験。各校に持ち帰り実践することでさらなる普及展開を目指す。

⑤成果報告会

（※内容については令和7年度実績例）

- 基調講演
- ポスターセッション



各校の実践をポスターで共有

令和8年度生成AIパイロット校について

R8年度はA区分：教育利用**10**自治体・**33**校（+認定校**74**校）

B区分：校務利用**100**自治体・**261**校（+認定校**16**校）

C区分：教材実証**51**自治体・**146**校（+認定校**32**校）

を生成AIパイロット校として指定し、令和8年度も引き続き成果・課題を検証。

※区分間での重複あり。ユニークでは149自治体、478校（認定校も含む）

都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名	都道府県	教育委員会名
北海道	北海道教育委員会	東京都	千代田区教育委員会	愛知県	春日井市教育委員会	奈良県	奈良県教育委員会	福岡県	北九州市教育委員会
	札幌市教育委員会		板橋区教育委員会		愛知県教育委員会		奈良市教育委員会		福岡市教育委員会
	長沼町教育委員会		八丈町教育委員会		知多市教育委員会		橿原市教育委員会	佐賀県	武雄市教育委員会
青森県	青森県教育委員会		神奈川県		調布市教育委員会	三重県	名古屋市教育委員会	和歌山県	海南市教育委員会
宮城県	仙台市教育委員会	相模原市教育委員会		一宮市教育委員会	田辺市教育委員会		東彼杵町教育委員会		
山形県	小国町教育委員会	開成町教育委員会		四日市市教育委員会	和歌山県教育委員会		熊本県		熊本市教育委員会
福島県	福島県教育委員会	新潟県	鈴鹿市教育委員会	岩出市教育委員会	熊本市教育委員会				
茨城県	かすみがうら市教育委員会	新潟県	長岡市教育委員会	滋賀県	湖南市教育委員会	鳥取県		鳥取県教育委員会	天草市教育委員会
	那珂市教育委員会	富山県	加茂市教育委員会	京都府	京都府教育委員会	島根県		島根県教育委員会	高森町教育委員会
栃木県	宇都宮市教育委員会	富山県	朝日町教育委員会	京都府	京都市教育委員会	岡山県	岡山県教育委員会	阿蘇市教育委員会	
群馬県	吉岡町教育委員会		富山県教育委員会		京丹波町教育委員会		岡山市教育委員会	山江村教育委員会	
埼玉県	埼玉県教育委員会	石川県	石川県教育委員会	大阪府	大阪府教育委員会	広島県	広島市教育委員会	大分県	玖珠町教育委員会
	さいたま市教育委員会		能美市教育委員会		堺市教育委員会		山口県		都城市教育委員会
	久喜市教育委員会	福井県	福井県教育委員会		貝塚市教育委員会	山陽小野田市教育委員会	宮崎県	日南市教育委員会	
	幸手市教育委員会		あわら市教育委員会		摂津市教育委員会	徳島県		西米良村教育委員会	
	所沢市教育委員会		坂井市教育委員会		東大阪市教育委員会	徳島県教育委員会	鹿児島県	鹿児島県教育委員会	
川口市教育委員会	長野県	小川村教育委員会	兵庫県教育委員会	香川県	多度津町教育委員会				
我孫子市教育委員会		長野県教育委員会	長野県教育委員会	姫路市教育委員会	愛媛県	四国中央市教育委員会			
千葉県	印西市教育委員会	静岡県	喬木村教育委員会	兵庫県	洲本市教育委員会	高知県	香美市教育委員会	沖縄県	沖縄市教育委員会
	船橋市教育委員会		牧之原市教育委員会		西脇市教育委員会		本山町教育委員会		嘉手納町教育委員会
	松戸市教育委員会	吉田町教育委員会	丹波篠山市教育委員会		高知市教育委員会	石垣市教育委員会			
	八千代市教育委員会						北谷町教育委員会		

※上記は認定校のみの自治体も含む
 ※3月31日時点で公表可能な自治体のみ掲載

生成AIについて学校教員が学ぶことのできる機会の提供について

- Webサイトやイベントなどを通じて教員向けに学習機会を提供（イベントの様子は動画でアーカイブ化）
- 教職員の学習可能時間や興味関心に応じて学習できるよう、比較的短い動画コンテンツなども整備。

Webサイトを通じた研修機会の提供



第1回「学校における生成AIの適切な使い方」（令和7年）

令和7年度 掲載動画タイトル

- 「生成AIの基礎と教育における活用可能性」（52分）
－東京大学大学院工学系研究科准教授 吉田 墨 氏
- 「生成AIを活用するための情報活用能力の基礎」（55分）
－信州大学教育学部准教授 佐藤和紀 氏
- 「学校における生成AIの適切な使い方」（15分）
－東京大学大学院工学系研究科准教授 吉田 墨 氏
- 「利用規約を確認する観点と運用上の留意点」（20分）
－西村あさひ法律事務所・外国法共同事業弁護士 福岡 真之介 氏

イベントを通じた研修機会の提供

生成AIパイロット校の実践事例等や有識者による学校教育におけるAI利活用について留意すべきことについて、一般公開するとともに、アーカイブ動画として公開

生成AIパイロット校における学習場面での利活用の事例

小学校

AIの正しい知識を身に付ける（情報モラル教育）



大阪市立高殿小学校

実施概要

AIについての基本知識を確認。生成AIを利用して作成した記事と実際の記事を比較。今後どのようにAIを活用したいか、考えをまとめる。

児童の反応

「インターネット上の情報をすぐに信じるのではなく、様々な資料と照らし合わせたり自分の経験をもとに考えることが大切だと感じました。」

中学校

憧れの人物を英語で紹介（3年次・英語科）



宮城県岩沼市立
岩沼北中学校

実施概要

作成した英作文を生成AIに直接入力したり、音声入力したりして、訂正が必要な部分やより自然な英語表現を提案してもらう。

生徒の様子

生成AIとやり取りしたことで、より正確な英文を作り周囲に紹介できていた。音声入力をすることで、自分の発音の正しさも確認できていた。

中学校

話し合いで問題を検討する（2年次・国語科）



実施概要

グループごとに設定した問題について話し合う活動。新たな視点や自分たちの意見について別の視点を生成AIから得て、検討を深める。

生徒の様子

生成AIから得た視点も、グループで話し合った内容に加えた上で再検討して、最終的な結論を出していた。

茨城県つくば市立
学園の森義務教育学校

高等学校

デスクトップアプリの作成（1年次・情報科）



茨城県立
竜ヶ崎第一高等学校

実施概要

Pythonを用いたアプリの作成時にAIを活用してコードを作成。プロンプトを工夫しながら、目的に見合うコードを組み込みアプリを完成させる。

生徒の反応

「自分では書けないPythonのプログラムを書いてもらえ、それを見て勉強することもできてよかった。」
「例をすぐに出してくれて、理解しやすかった。」

AIを活用したグローバル人材育成のための英語教育強化事業

令和7年度補正予算額

4億円



現状・課題

- 英語で地域の魅力を発信する等の発信力はグローバル人材に不可欠な要素
- 生徒の英語力は向上傾向にあるが、社会の期待とは依然大きな乖離
- 英語を使う機会の圧倒的少なさや学ぶ動機付けの弱さが積年の課題
- AIの効果的な活用により、練習量の増加や動機付けの強化が期待できる

次期学習指導要領の検討を見据え、教師やALTによる指導とAI活用との効果的な組み合わせを実証研究し、知見を早急に蓄積する必要

事業内容

AIを英語の授業等で活用するモデル校※を指定 …約200校

※国公私を想定

【考えられる取組項目】

- 地域の魅力発信等に向けた会話練習量の増加や言語活動の充実
- 家庭学習におけるAI活用方法、授業との連携モデル構築
- 個々の児童生徒の興味関心を踏まえた個別最適な教材生成
- 不登校や特別な支援を要する児童生徒への活用方法

件数

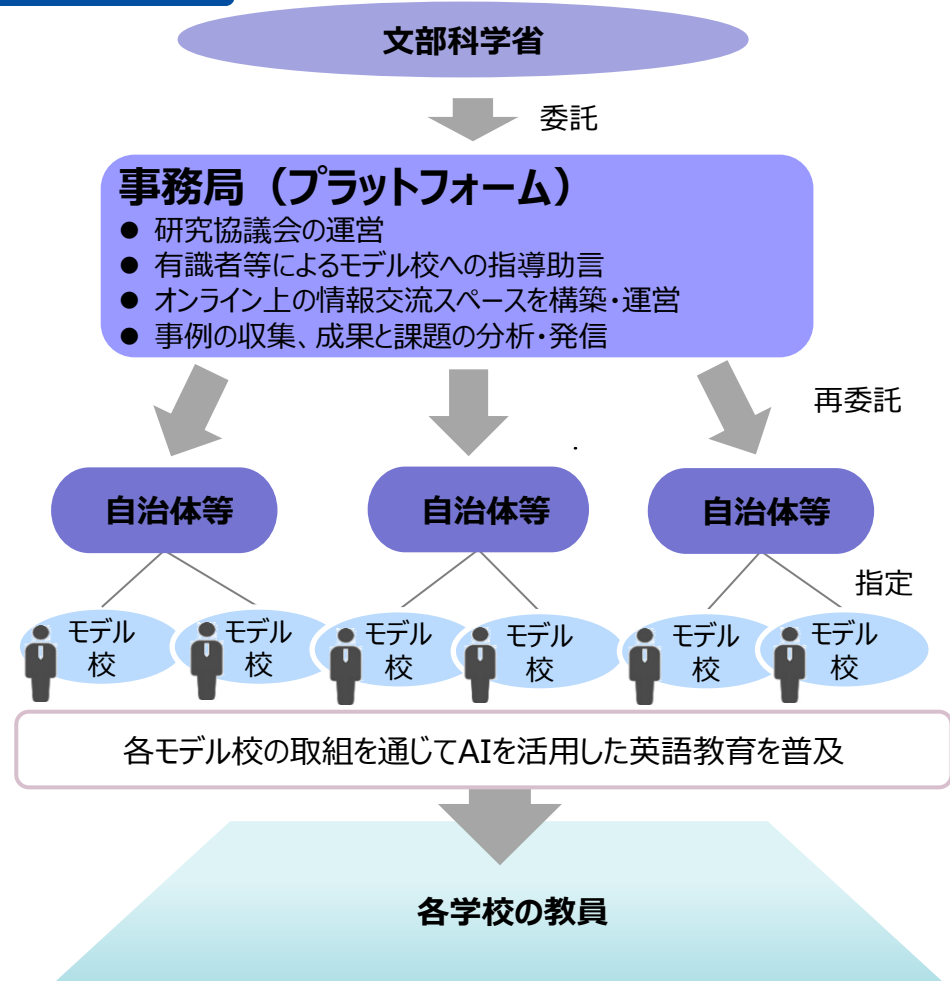
事務局：1箇所程度
都道府県・市区町村教育委員会、学校法人、国公立大学法人等：22箇所程度

委託先

事務局を民間企業等に委託

- 経済財政運営と改革の基本方針2025
(略) **AIの活用や地域の魅力発信等を通じ、英語教育を推進する。**
- 地方創生2.0
(略) **AI活用による英語での地域の魅力発信** (略) に取り組む

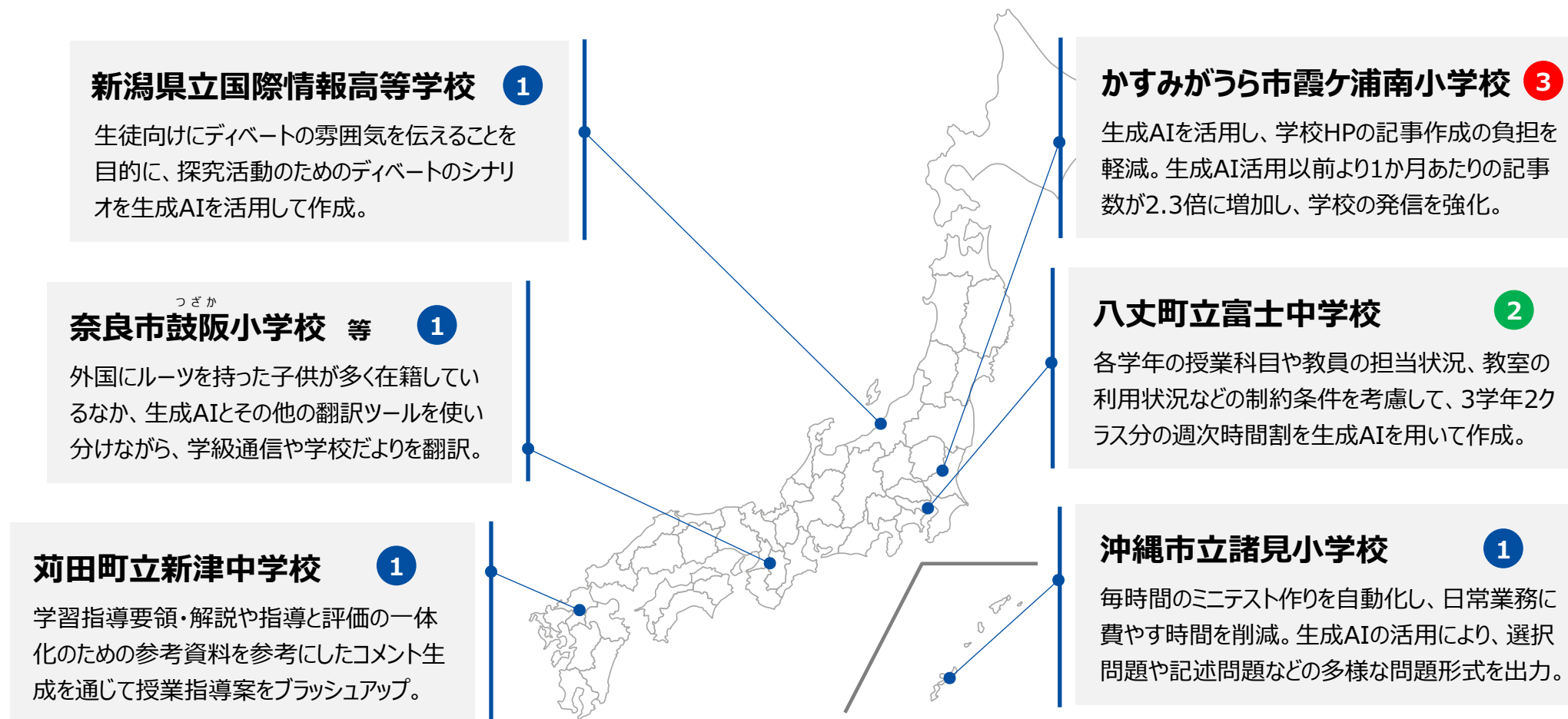
事業スキーム



生成AIパイロット校における校務での利活用の事例

ガイドラインで例示している、① 児童生徒の指導に関わる業務の支援（授業準備・部活動・生徒指導等）、② 学校の運営に関わる業務の支援（教務管理・学校からの情報発信・校内研修等）、③ 外部対応への支援 等への活用例が全国の生成AIパイロット校から生まれているところ。

全国の生成AIパイロット校における取組状況（校務利用）



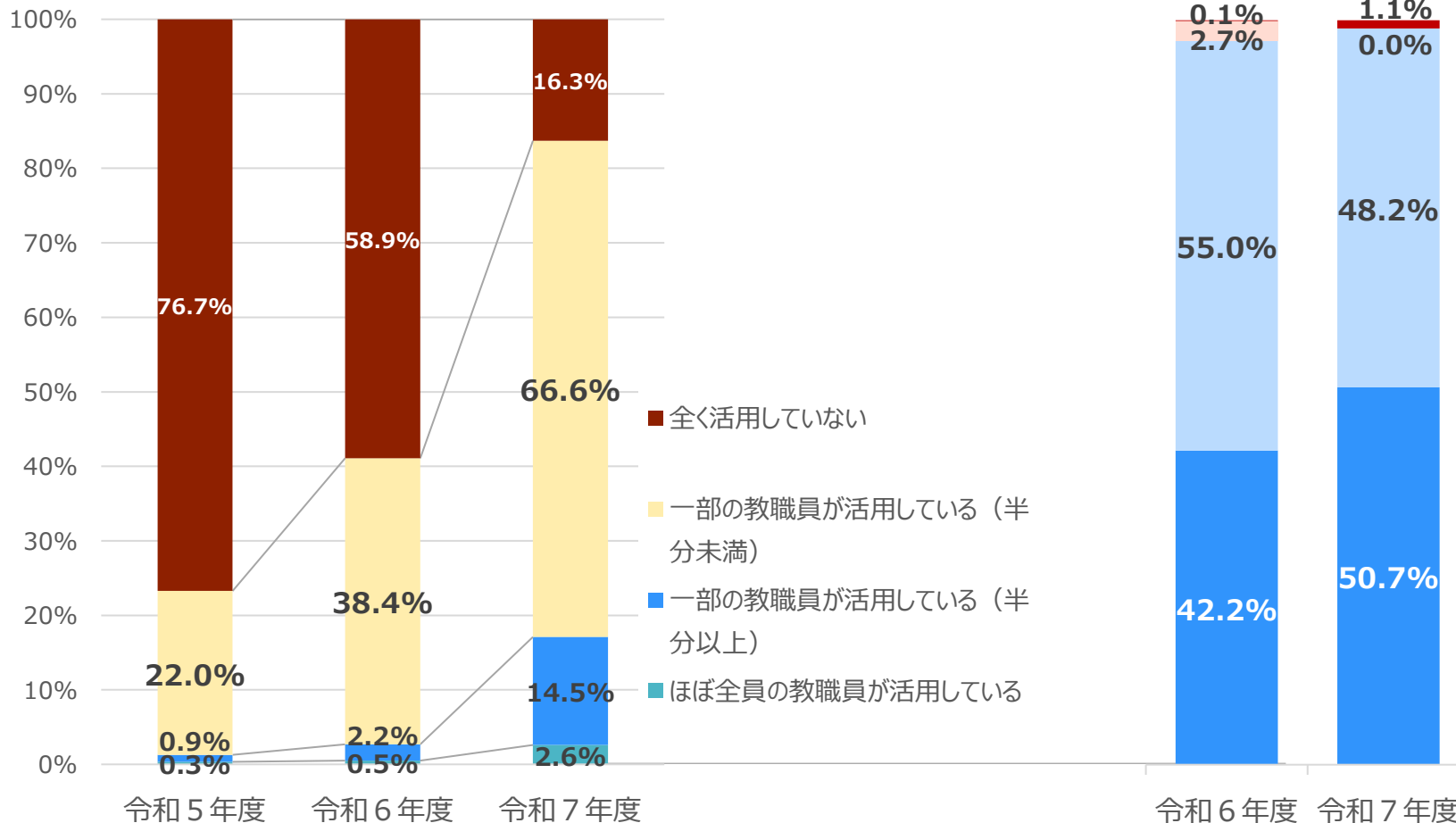
校務における生成AIの利活用の状況

- 教職員の校務における生成AIの利活用は広がりつつあるものの取組は道半ば。生成AIを活用した学校で、働き方の改善に効果があったと思う学校が98%と非常に高い割合。

GIGAスクール構想の下での校務DXチェックリスト～学校・学校設置者の自己点検結果～[確定値]

「初等中等教育段階における生成AIの利用に関するガイドライン」に基づき生成AIを校務で活用していますか。

校務DXに取り組んだことで教職員の働き方の改善に効果があったと思うか
※一部の教職員が活用している（半分以上）ほぼ全員の教職員が活用しているという回答者への質問



教職員の半数以上が活用した学校のうち98%が働き方の改善に効果があったと実感

セキュアな環境における生成AIの校務利用 (令和6年度・7年度実証研究事業)

現状

- 「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン (Ver.2.0)」(令和6年12月)でも改めて、**学校の働き方改革や教育活動の高度化のため、校務において生成AIを積極的に利活用することは有用である**と示されている。
- 上記ガイドラインを前提に、生成AIパイロット校事業では、**一般向けの汎用的な生成AIサービスを用いた事例が創出**されている。
- 一方で、**一般向けの汎用的な生成AIサービス**は各自治体の制度や環境、実態を考慮したサービス設計にはなっていないことから、**成績情報等の重要性の高い情報を入力できず、特に校務を実施する際の利活用の障壁となっている**。
- 上記を踏まえ、重要性の高い情報も活用するための**セキュアな環境 (セキュリティの担保されたデータレイク等)**を構築したうえで、**生成AIを活用する実証事業を実施**。

成果 1 (学校現場における実証)

- 生成AIの活用とした**セキュアな環境の構築に係る課題を整理**。
- 生成AI×ダッシュボードの活用方法等に係る課題の整理**。
- 学校現場における**セキュアな環境下での生成AIの利活用による事例の創出**。

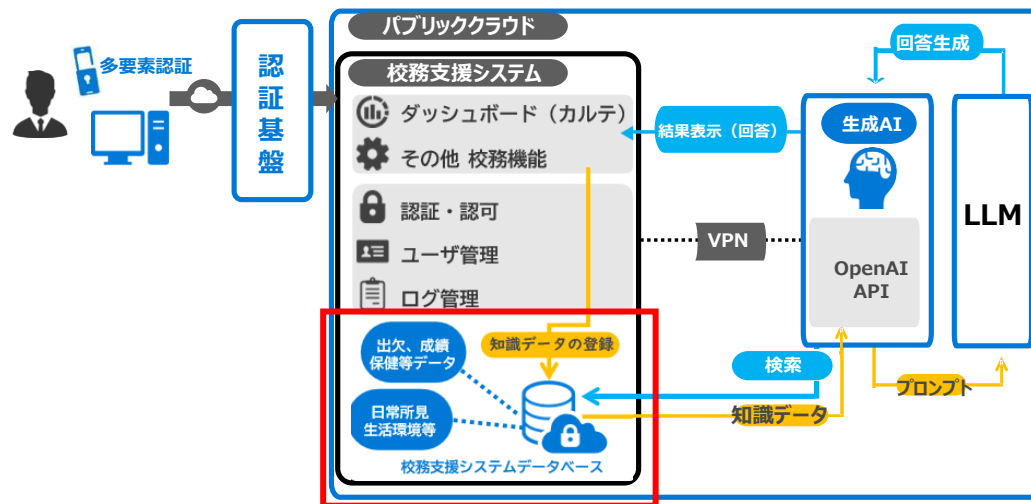
成果 2 (校務支援システムの機能向上)

- 校務システムに蓄積されたデータの活用を前提にした**セキュアな環境構築等に係る課題の整理**。
- 具体的な業務場面を想定した試作版を開発し、**校務支援システムに軸足を置いた生成AI活用に係る効果を検証**。

実証研究において創出された生成AI活用事例

業務例	生成AI利用ステップ① 汎用的な生成AIサービスの活用	生成AI利用ステップ② セキュアな環境下における生成AIの活用
所見案作成	生成AIとの壁打ちを通じた所見案作成 [高度化] 効率化	日々の見取りデータに基づく所見案作成 [高度化] 効率化
報告書等の素案作成	プロンプト入力のみによる文案作成 [高度化] 効率化	校内文書に準拠した文案作成・校正 生徒指導記録を用いた校務分掌方針案作成 [高度化] 効率化
データ分析	-	校内アンケートを用いた分析および示唆 取りまとめ [高度化] 効率化

校務システムに蓄積されたデータの活用を前提にしたセキュアな環境



- 一般向けの汎用的な生成AIサービスの活用には、重要性の高い情報の取り扱いの観点から、業務の効率化に明確な限界が存在する。
- 一方で、**学校現場に蓄積されたデータを活用することができるセキュアな環境下においては、業務の更なる効率化はもちろん、業務の「質の高度化」にも寄与**することが想定される。

校務における生成AIの利活用を通じた業務時間の削減

- 業務の性質や各地域・学校の状況によるが、**校務における生成AIの活用は時間削減が起きうる可能性。**
- これら過年度の知見等を踏まえながら、令和8年度中に**教育委員会担当者向けに校務における利活用のための手引きを取りまとめる。**

過年度の事業で見られた業務削減の例

ガイドライン例示	生成AIパイロット校での事例	セキュアな環境における事例
① 児童生徒の指導に関わる業務の支援（授業準備・部活動・生徒指導等）	学習指導案の作成（東京都八丈町） <ul style="list-style-type: none">● 技術科の学習指導案の作成において活用。作業時間が90分から約30分程度に削減。事前に作成していたプロンプトをもとに、担当教員が期待する6~8割程度の完成度で出力ができ、出力結果をもとに作成することで作業効率が改善。	所見の素案作成（埼玉県新座市） <ul style="list-style-type: none">● 20名以上の所見の作成にこれまでは1か月程度かかっていたが、生成AIの活用により1週間程度に削減された。特別支援学級では個別の教育課程が組まれており、プロンプトを生徒ごとに工夫することで、これまで以上に各生徒の様子を細やかに見取ることができるようになった
② 学校の運営に関わる業務の支援（教務管理・学校からの情報発信・校内研修等）	事例の情報収集（神奈川県川崎市） <ul style="list-style-type: none">● 私立高校を受験するにあたっての奨学金や補助金制度の情報収集に活用。ファクトチェックが必要ではあるものの、情報収集をまとめて行うことができ、1時間程度かかっていたものを20分程度に削減。	研修報告書の素案作成（兵庫県宝塚市） <p>これまで報告書の作成に5-6時間かかっていたものが、1時間程度に削減できた。業務の負担感は大幅に削減できた。</p> <p>生成AIより提案のあった報告書文案には受講した研修の内容について網羅的に記載されており、自身で作成したものと比較して抜け漏れや穴に気づくことができた。</p>
③ 外部対応への支援	学校HP記事の作成（かすみがうら市） <ul style="list-style-type: none">● 生成AIを活用する前は、1か月あたりの記事数は6件だったところ、生成AIを活用しての記事作成は1月あたり13.88件に更新頻度が増えるとともに、1件の記事作成あたりの業務工数を軽減。HPの閲覧数も増加した。	アンケートの要約・分析（沖縄県石垣市） <ul style="list-style-type: none">● これまで2時間程度かかっていたアンケート結果の分析と考察が、30分程度で完了した。複数のアンケート回答結果を基に考察が出され、その記述も客観的でわかりやすいものであったため、利用者の理解も円滑に進んだ。

学びの充実など教育課題の解決に向けた教育分野特化の生成AIの実証研究事業



文部科学省

- 多様な子供たちの状況に対応し、個別最適・協働的な学びを実現することが求められている中、それに対する**生成AIの活用可能性を整理・検証し、教育分野に特化した生成 AI のモデル・サービスの開発等を通じて課題解決の可能性を検証**する
- 汎用基盤モデルを活用した約款型サービスではなく、**教育分野に特化させるための参照データの整備やモデルのチューニング、現場での実装の在り方等、様々な検討を行い、学校現場実装の知見を体系化**する
- 期間：2025年8月～2026年2月末、件数：2,000～5,000万円×5件

テーマ	実証事業者	実証概要	実証フィールド
テーマ i 個別最適・協働的な学びの深化の実現		実社会に紐づく学びによる学習意欲の向上や主体的・対話的で深い学びの実現 ・ 教科書データやニュースデータを活用した生成AIにより、教科書学習・探究学習における多様な視点・観点等を提供	✓ 千葉県印西市、東京都渋谷区、鹿児島県肝付町、高知県須崎市、埼玉県行田市等
		教員の専門性を踏まえた授業計画力の向上による児童生徒の学びの深化の実現 ・ 学習指導要領や児童生徒の実態、教職員の経験等のデータを活用した生成AIとの対話により、授業のゴールや授業内容、評価等を生成	✓ 群馬県吉岡町、大阪府箕面市
テーマ ii 誰一人取り残されない教育の実現		特別支援における支援計画等の作成支援による教員の負荷軽減・指導力向上や、自立活動の深化の実現 ・ 過去の教育支援計画や指導計画等のデータも活用し、生成AIが流れ図や個別の教育支援計画、年間指導計画等を生成	✓ 静岡県（県立特別支援学校）
		多文化多言語の児童生徒のことばの発達と習得状況の見取りによる個別最適な指導の実現 ・ 「ことばの力のものさし」や、個別の指導計画案等のデータを活用し、生成AIが教員向け「見取と指導のアドバイスシート」の一部を生成	✓ 大阪府等
テーマ iii データ利活用の促進		教科書データの活用基盤の構築による学習サービスの品質向上の実現 ・ 中学校の数学、社会、理科、英語の教科書を意味単位で構造化し、メタ情報が付与されたデータベースによるRAGを基盤として提供	✓ 立命館大学附属守山中学校 ✓ 教育サービス事業者

現状・課題

- 生成AIの利活用に関しては、令和6年12月にガイドラインを改訂し、学校現場における各主体や場面に応じた利活用の方向性を示してきた。このような動きとともに、技術の進展に対応しつつ実証等を通じて教育分野における様々な活用余地を試行してきた。しかし、その利活用の方針についての浸透や実装は道半ばである。
- 特に学校の働き方改革の観点から校務での利活用は有用としている一方、生成AIを校務で利活用している学校は限定的である。
- このような課題やAI法の成立などの動きも踏まえ、教育課題の解決に資する利活用について実証研究を踏まえた調査研究を更に進める必要がある。加えて、利活用に向けた実証的な取組・事例創出やその情報収集・発信を継続的に進めていく必要がある。

骨太方針2025 (R7.6.13閣議決定) (教育DX)
こどもたちの個別最適な学びと協働的な学びの一体的な実現及び教職員の負担軽減に向け、国策として推進するGIGAスクール構想を中心に、生成AI活用も含めて教育DXを加速する。

1. 学校や教育委員会における実証研究 (6億円)

a.) 生成AIパイロット校の指定を通じた利活用事例の創出

事業概要

- 生成AIの利活用の実証を学校単位で進める指定校を採択。
- ①教育利用：教科等横断的かつ学年横断的に活用する申請校を優先採択
 - ②校務利用：活用業務・方法を「可視化」し、情報共有する申請校を優先支援

想定成果

- 年間指導計画やカリキュラムに体系的に位置付けて行われる取組事例の創出
- 汎用基盤モデルを活用した、校務での利活用事例の創出、学校間の事例共有

b.) 教育課題の解決に向けた生成AIの実証研究事業

事業概要

校務DXを通じた働き方改革の実現、多言語対応が必要な外国にルーツを持つ子供・保護者への対応などの誰一人取り残されない教育の実現、一人一人に合った個別最適な学習の提供、生成AIに関連するデータ活用の実践など、教育分野の特定の課題に対し生成AIを活用した課題解決の可能性を検証する実証研究を行う。

テーマ課題例

- 働き方改革に資する校務における生成AIの利活用**
- 負担感の大きい事務や外部対応、時間割編成等の業務の効率化・高度化
- 誰一人取り残されない学びの保障に向けた生成AIの利活用**
- 特別支援、外国人児童生徒の指導・多言語対応への支援
- 児童生徒の個別最適・協働的な学びの実現に向けた生成AIの利活用**
- 学びの可視化や主体的・対話的で深い学びを実現する生成AIの利活用
- データの利活用に向けた生成AIの利活用実証事業**
- マルチモーダルな生成AIを活用したデータの分析・可視化、質の高いデータの活用

想定成果

- 過年度で整理された課題解決の可能性に基づく実証事業の実施
- 既存の対応方法よりも効率的かつ効果的な生成AIモデル・サービスの創出

2. 生成AIの利活用に関する調査研究 (2億円)

a. 生成AI利活用に向けた事例収集・Webサイトの運営等

- 教育分野における生成AIの利活用に関するワークショップ・アイデアソン等のイベント・研修を実施し、学校における利活用について好事例収集を行う。
- また、生成AIの技術の進展に応じ、必要な情報提供や、好事例の発信を行うウェブサイトを経営的に運営、情報発信を行う。



b. 校務での生成AIの利活用推進のための調査研究

事業概要

- 学校の働き方改革を推進する上では校務での生成AIの利活用が有用と考えられる。一方で、生成AIは急速に進化を遂げておりサービスの在り方も変化していることから、教職員・教育委員会が生成AIをどのように利活用すればよいかを十分に把握できておらず、その結果生成AIが教育現場で十分に利活用されていないという課題がある。
- 昨年度までに教育現場で創出された好事例及び課題の収集・分析を実施し、教職員に対する研修の在り方や適切な利活用場面を整理するとともに、教育委員会を主な読み手とした手引きを策定することにより、効果的な校務DXを通じた学校の働き方改革を推進する。

想定成果

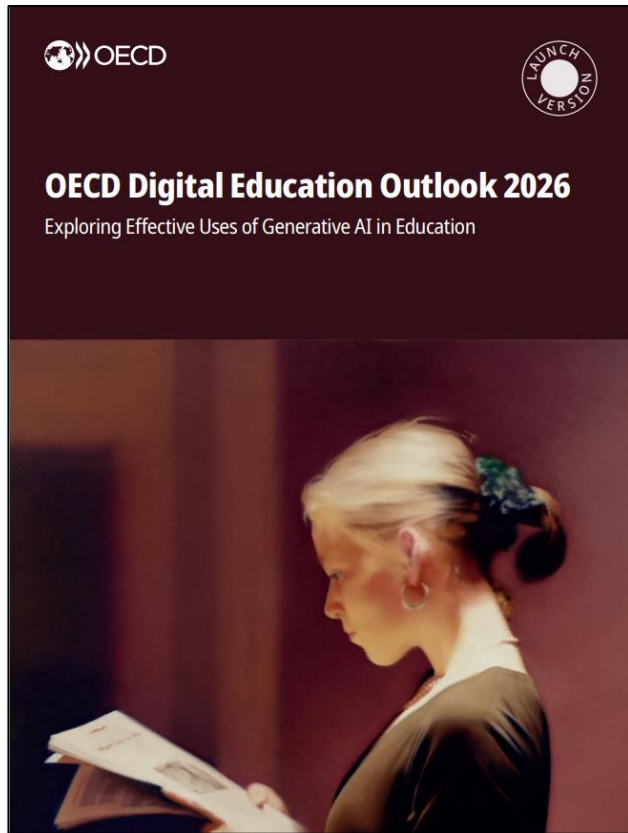
- 校務での生成AIの利活用に関する手引きの作成

2

今後に向けた取組

OECD Digital Education Outlook 2026

OECD「Digital Education Outlook 2026」は、教育分野における効果的な生成AIの活用に関する最新のエビデンスをまとめたOECDの基幹的報告書であり、生成AIが学習の質や教育制度全体の運営効率を高める可能性と、過度な依存による学習者の認知的な負荷の低下や教員の専門性・自律性への影響といったリスクを併せて示し、適切な政策・ガバナンスの重要性を指摘している。



2026年1月19日公表（計247頁）

Overview	Part1	Part2	Part3
概要	生徒の学習成果の向上	教員の専門性の拡張	システム・制度管理の改善

- 生成AIは世界中の教育システムに急速に導入されつつあり、より一人一人に応じた支援の拡張、フィードバックの質の向上、評価の一部自動化を可能にしている。
- 他方で、生徒や教員の主体性（エージェンシー）や学習過程を省略すること（いわゆる認知的オフロード）による学習効果を低下させるリスクも指摘されている。
- 進むべき道は技術を拒絶することではなく、教育的な意図性と方法論的な厳密さへの取組である。単に生成AIが「学生の課題遂行能力の向上」を問うのではなく、深く意味のある持続的な学習を育むためにどう活用できるかに焦点を当てる必要がある。（第2章）
- 教師が学生の主体性を促し、学生の成果物よりも思考や学習プロセスを重視することが求められる。構造化された指導戦略や評価設計といった明示的な教育モデルとを組み合わせたシステムは、汎用モデルよりも有望である。（第2章）
- 汎用的な生成AIか、教育分野特化な生成AIかに関わらず、生成AIサービスは、教師による教育的な意図のもとに学習場面の中で活用されることが重要。（第1章）
- 教育分野における生成AIの未来は、教師のタスクの自動化をいかに効率的にするかではなく、教師が専門的な判断を行使し、能力を拡大する力をいかに効果的に強化するかで決まる。（第7章）
- 政策立案者の課題は、生成AIが学習の近道（ショートカット）ではなく、学習のパートナーとなることを保証すること。（Overview）

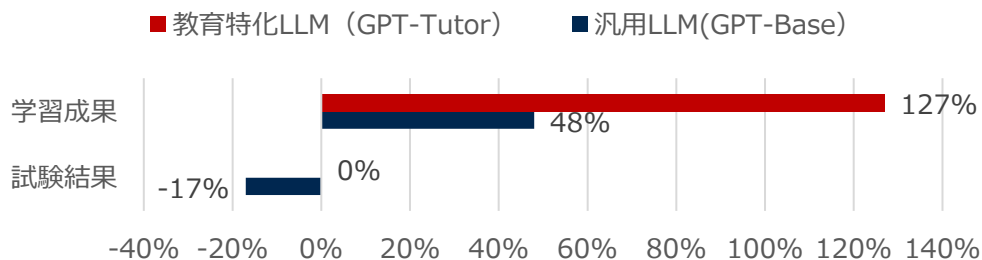
（出典）OECD（2026）,OECD Digital Education Outlook 2026: Exploring Effective Uses of Generative AI in Education, OECD Digital Education Outlook 2026 (EN) ※本資料では、主に学習場面や校務利用を想定し、Part1・2の内容を基に資料作成者において作成

教育分野特化に関連する学術研究の例 (OECD Digital Education Outlookより)

- 汎用モデルのみでは、資質・能力の育成やそのプロセスを毀損するリスクが学術研究でも蓄積されている。一方、AIによるフィードバックの有効性や経験の浅い教師を支える可能性も指摘されている。

学習成果と汎用AIに関する研究例 (Bastani et al., 2024)

- トルコの高校生1,000名を対象とした、数学の学習場面で、①授業ノートと教科書、②汎用LLM、③教育用LLMを使用した3群に分けたランダム化比較試験で学習成果と試験結果の比較を行った学術研究。
- 学習成果としては、AIを使用した②③グループは、①グループよりも正答率が大幅に高く、特に教育用AIを群で最も顕著な向上。一方、何も見ずに解答させる形式で知識を評価すると、②グループは①よりも低い成績を示した。



Bastani, H. O. Bastani, A. Sungu, H. Ge, O. Kabakci and R. Mariman (2024), "Generative AI Can Harm Learning", The Wharton School Research Paper, Available at SSRN: <http://dx.doi.org/10.2139/ssrn.4895486>

汎用AIの活用と学習過程に関する研究例 (Chen et al.(2025))

- エッセイ修正の際に「人間の専門家」に助言を求める場合と「汎用LLM」に助言を求める場合の行動パターンを比較した学術研究。
- 人間の専門家と対話した学生は、「診断 → 支援要請 → 評価 → 反復 → 実施」という段階的なプロセスを踏む一方、汎用LLMを利用した学生の一部は、AIが提示した解決策をそのまま即座に実行し、「診断」「評価」「反復」という思考プロセスを頻繁に省略していた。深く考えずにAIに頼る「認知的オフローディング」が発生していると指摘。



Chen, A., M. Xiang, J. Zhou, J. Jia, J. Shang, X. Li, D. Gašević and Y. Fan (2025), "Unpacking help-seeking process through multimodal learning analytics: A comparative study of ChatGPT vs Human expert", Computers & Education, Vol 226, p. 105198, <https://doi.org/10.1016/J.COMPEDU.2024.105198>.

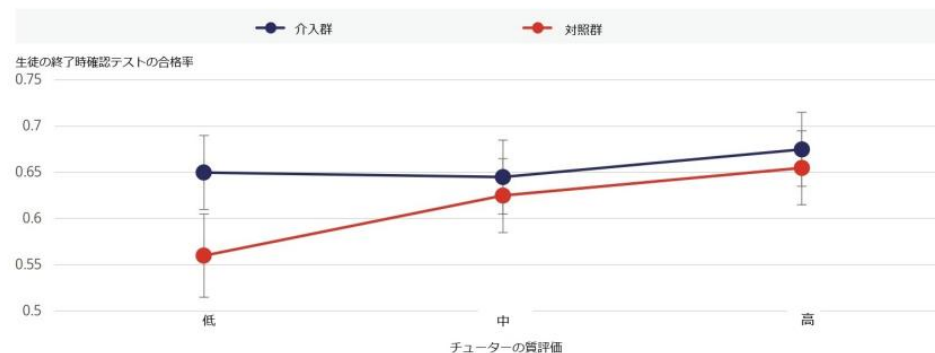
フィードバックに関する研究例 (Kaliisa et al. (2025))

- AIによるフィードバックと人間によるフィードバックを比較した41の研究を対象とするメタアナリシス。
- **AIが生成したフィードバックと人間のフィードバックは統計的に類似した学習利得をもたらすが、学習者は人間のフィードバックをより信頼性が高く意味があると認識している。** AIのスケラビリティを活用しつつ、人間のフィードバックの深く共感的かつ文脈的な特徴を保持するハイブリッドアプローチを提唱している。

Kaliisa, R., K. Misiejuk, S. López-Pernas and M. Saqr (2025), "How does artificial intelligence compare to human feedback? A meta-analysis of performance, feedback perception, and learning dispositions", Educational Psychology, <https://doi.org/10.1080/01443410.2025.2553639>.

教職員の指導支援に関する研究例 (Demszky, D. (2026))

- スタンフォード大学のEduNLPラボが開発したTutor Copilotは、オンライン指導を行う指導者をリアルタイムで支援するAIシステム。(チューターが指導中に生徒の誤りに気づいた際などにツールを起動すると、AIが教育学的に有効な対応戦略や、編集可能な回答例を提示する。)
- **AIツールの活用により、経験の浅いチューターでは、生徒の確認テストの合格率の改善(9%)**が見られた。また、生徒に説明を促したり、思考を導くための問いかけ、正しい試みを肯定したりするなど、生徒の深い関与と理解を促進する教育戦略をより頻繁に用いるようになった。



Demszky, D. (2026), "Generative AI tools to support teachers: a conversation with Dorottya Demzsky", in OECD(ed.), OECD Digital Education Outlook 2026: Exploring Effective Uses of Generative AI in Education, OECD Publishing, Paris, <https://doi.org/10.1787/062a7394-en>.

AIに関するリスクや懸念に関する学術研究の例

- AIはその有用性が多く指摘される一方、ディープフェイク等を含む犯罪への悪用や依存性、認知過程に与える影響等も指摘されている状況。これらの点は現下に学術的な知見が積み重なりつつある状況であり、技術の進展に応じて判断する必要。

過度な依存やバイアスに関するリスク

- こどもの権利の保護に向けUNICEFが2025年12月に公表・改訂した指針では、こどもがAIを擬人化することやチャットボットに対して感情的な依存（疑似的な社会的関係）を築いてしまうリスク、AIに愛着を持つことで個人情報を開示したり、AIによる操作や搾取に対して無防備になるリスクを指摘。

UNICEF(2025) Guidance on AI and Children, Updated guidance for governments and businesses to create AI policies and systems that uphold children's rights より

- アメリカ心理学会の専門家パネルは、AIにより依存や既存のバイアスをさらに強化する可能性を指摘。特に、汎用的な消費者向けのモデルはユーザーに好意的に返答するよう訓練をされており、それにより確認バイアスや不適応な信念を強化することやユーザーの既存の信念を増幅・強固にするエコーチェンバーを生成するリスクを指摘。また、偏ったデータで訓練されたモデルは、社会的に弱い立場にある集団に対して、差別的または有害な助言を生成するリスクを指摘。

American Psychological Association (2025) Use of generative AI chatbots and wellness applications for mental health, "4. Protect users from misrepresentation, misinformation, algorithmic bias, and illusory effectiveness" より

批判的思考やメタ認知等の学習過程への影響

- LLMを用いたエッセイ執筆が学習・脳活動・当事者意識に与える影響を、脳科学的に分析した研究。LLMは利便性を提供する一方で、認知的負荷の低下、記憶・理解の弱化、主体性の低下といった教育上の潜在的リスクを伴う可能性を示唆。認知負債等のLLM依存の長期的影響についても検証が必要と指摘。

Kosyama et al. (2025) Your Brain on ChatGPT: Accumulation of Cognitive Debt when Using an AI Assistant for Essay Writing Task

- AIツールの使用と批判的思考スキルの関係を調査し、認知的オフローディング（認知負荷の外部化）が媒介要因として機能するかに焦点を当てた研究。AIツールの頻繁な使用と批判的思考能力との間に有意な負の相関があり、若年層はAIツールへの依存度が高く、批判的思考スコアが低い傾向。

Gerlich, M. (2025). AI Tools in Society: Impacts on Cognitive Offloading and the Future of Critical Thinking. *Societies*, 15(1), 6.

- 生成AIの利用が論理的課題における成績と自己評価（メタ認知的判断）にどのような影響を与えるかを、大規模実験で検証した研究。AIは成績を向上させる一方、自己評価の過大化を招き、メタ認知の正確性を低下させることが示された。

Daniela Fernandes et al. (2026) AI makes you smarter but none the wiser: The disconnect between performance and metacognition, *Computers in Human Behavior*,

安全かつ主体的にAIを活用できる学習環境の構築に向けた取組の方向性

- 次期「学習指導要領」の理念を体現すべく、「ガイドライン」の速やかな改訂を行うとともに、先進事例の創出・横展開の加速による、AIの社会実装に向けた教育・人材育成を推進。また、これらを実現する環境として、学校現場で「安全かつ主体的にAIを活用できる学習環境の構築」に向けた取組を加速。

現状・課題

ルールが明確でなく、リスクを恐れ適切な利活用が広がらない

- ・ ガイドラインが原則論に留まり、具体性が乏しい。
AX時代に必要な情報活用能力の抜本的向上に対応する必要
- ・ AIのリスクを過度に感じていたり、有効な活用方法が浸透していない。

汎用AIでは学習や教師の専門性を支えられない

- ・ 思考力の低下や依存症等の児童生徒特有のリスクの発生を防げない
- ・ 不登校や特別な支援を要する児童生徒への対応等、きめ細かな教師の専門性の高い業務に対応できる出力ができない

偽誤情報の出力リスクなどを、防ぐためのデータがない

- ・ 偽誤情報や児童生徒に有害な出力や、児童生徒の発達段階を踏まえていない難しすぎる情報や大量の情報を出力をしてしまう
- ・ 防ぐためにはデータが必要だが、公共性が高く整備が進みにくい

校務系の重要性の高いデータを活用できない

- ・ 校務PCからインターネットにつなぐことができず、AIを活用できない
- ・ 十分なセキュリティが担保されておらず、AIに児童生徒の成績データ等を踏まえた状態で、AIを活用して業務を行うことができない

目指す方向性（やるべきこと）

① ガイドラインの改訂と研修を通じた周知広報

- ・ AX時代に必要な情報活用能力の考え方を踏まえ、ガイドラインで効果的な場面と活用すべきでない場面を具体例を明示
- ・ リスクを踏まえた研修機会を拡充し教職員のAI活用を促進



② 教育分野に特化したAIの実証研究

- ・ 校務支援システムへのAI実装などを通じて働き方改革を推進
- ・ 多様な個性や特性・背景への対応、深い学びの実現に向けた活用、新技術の検証等、次期指導要領の実現可能性を確保



③ 基盤的なデータの整備とAIのリスク評価

- ・ 実装に必要な指導要領や参考資料・教科書等の公共的かつ質の高いデータのAI-Ready化。他機関とも連携し、有害な出力をさせないガードレールとなるリスク評価データ等を整備



④ 学校現場で安全にAIを使えるインフラ整備

- ・ セキュリティの担保された環境を整えることで、校務における保有データの利活用を推進し、教職員が校務でAI活用できる環境を実現



初等中等教育における生成AIの利活用に関するガイドラインの改訂（ver2.1）に向けて

- 学習指導要領の改訂に向けて情報活用能力の抜本的向上に向けた議論が進んでいる中、生成AIについては、普段利用する検索エンジンにも AI が組み込まれるなど学校現場において急速に利活用が広がっている。また、リスクやその利活用に関する国際的・学術的な議論が蓄積されてきていること、文科省での実証研究をはじめ各学校における具体的な実践事例が蓄積されてきている状況。
- このような状況を踏まえ、あくまで一律の禁止や義務付けを求めるものではない参考資料という位置づけや、現在の構成、「人間中心の利活用」といった考え方を基本としつつ、以下の論点などについて、専門家や教育関係者・事業者にヒアリングを行いながら、本委員会で報告を行い、学習指導要領の改訂を待たずにガイドラインを改訂してはどうか。

■ 検討項目（案）

No	項目	現行ページ	具体的なイメージ
1	技術の進展に関する現状認識・リスク関連の学術研究、国際的な議論	第1章 p3・5	<ul style="list-style-type: none">・ エージェントAI等の技術動向・ 学術研究の動向やOECD・諸外国等での国際的な議論
2	教師の役割	第2章(1) P7	<ul style="list-style-type: none">・ 教師の役割と教師（AI）が担うべき業務
3	AIサービスの提供者に求められる視点	第2章(1) P8	<ul style="list-style-type: none">・ 教育分野特有のリスク低減に向けた事業者の対応事項（具体の部分は関係機関とも連携）
4	情報活用能力	第2章(2) p8・9	<ul style="list-style-type: none">・ 情報活用能力の抜本的向上・ 小中高段階におけるAIの学習
5	学習活動で利活用する場面	第3章-2 p16・17・20	<ul style="list-style-type: none">・ 過度な学習過程のショートカットへの対応（認知的オフロードの発生による深い学びを阻害している例等）・ AIに関連した学習課題の提示や評価に関する考え方
6	教職員の校務場面における活用	第3章-1 p13・14	<ul style="list-style-type: none">・ AIの活用により効率化・高度化できる校務の具体例

參考資料

AIに関するリスクや懸念の全体像

- AIは急速に普及する汎用的な技術であり、様々なリスクもこれまで指摘されている。（※AIエージェント、フィジカルAIなど技術の進展は日進月歩である点にも留意。）このようなリスクの存在をもって直ちに利活用を否定するものではなく、リスクの存在を踏まえて人間中心の利活用に向けて向き合っていく姿勢が重要。

AI事業者ガイドライン（ver1.2）別添（総務省・経済産業省,2026）

大分類	中分類	リスク例
技術的リスク （＝主にAIシステム特有のもの）	学習及び入力段階のリスク	データ汚染攻撃等のAIシステムへの攻撃
	出力段階のリスク	バイアスのある出力、一貫性のない出力等 ハルシネーション等による誤った出力
	事後対応段階のリスク	ブラックボックス化、判断に関する説明の不足
社会的リスク （＝既存のリスクがAIにおいても発生又はAIによって増幅するもの）	倫理・法に関するリスク	個人情報の不適切な取扱い等
		生命等に係る事故の発生
		差別的出力
		過度な依存
	経済活動に関するリスク	悪用
		知的財産権等の侵害 金銭的損失 機密情報の流出 労働者の失業 データや利益の集中 資格等の侵害
情報空間に関するリスク	偽・誤情報等の流通・拡散	
	民主主義への悪影響	
	フィルターバブル及びエコーチェンバー現象	
	多様性・包摂性の喪失 バイアス等の再生成	
環境に関するリスク	エネルギー使用量及び環境の負荷	

初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン（文部科学省,2024）

（AIに人格があるかのように誤認するリスク）

生成AIは流暢な文章やコンテンツを生成することが可能であり、また人間のコミュニケーションと遜色ないスピードで反応するレベルに到達している。児童生徒が、人間のように振る舞うAIに触れることで、AIに人格があるかのように誤認するリスクがある。

（資質・能力の育成に悪影響を与えるリスク）

学習活動の目的や育成したい資質・能力を十分に意識しないままに、安易に生成AIを児童生徒の学習活動に導入することで、AIに依存したり、AIの答えを鵜呑みにしたりするなど、目的に即した必要な学習過程が省略されてしまい、資質・能力の育成に繋がらないリスクがある。

（バイアスの存在とそれによる公平性の欠如）

生成AIは既存の情報に基づいて回答を作るため、その答えを鵜呑みにする状況が続くと、既存の情報に含まれる偏見を増幅し、不公平及び差別的な出力が継続・拡大する可能性がある。生成AIサービスを利用する人間側にも、流暢な出力を見ると正しいと感じてしまう流暢性バイアスや、人間の判断や意思決定において自動化されたシステムや技術に過度に依存してしまう自動化バイアス等の様々なバイアスが存在している。

（機密情報や個人情報に関するリスク）

生成AIサービスでは、入力された機密情報や個人情報が、生成AIの機械学習に利用されることがあり、他の情報と統計的に結びついた上で、また、正確又は不正確な内容で、生成AIサービスから出力されるリスクがある。

（著作権に関するリスク）

生成AIにおいては、既存の著作物と類似した生成物が生成される可能性があり、そのような生成物の利用の態様によっては著作権侵害が生じるリスクがある。

（外部サービスの利用に起因するリスク）

生成AIサービスはその利用形態も多様であり、利用に当たってはサービス提供者の定める利用規約に基づくことが求められる。その際、現在は無償のサービスであったとしても将来的に有料のサービスになる価格の変動リスク、サービス停止等の提供条件の変動リスク、日本の法令が適用されないリスクや係争時における管轄裁判権が日本国外になるリスクがあるほか、技術やサービスの進展が早いことから利用規約が頻繁に変更されるリスクも考えられる

AI技術が既存のリスクを増幅させる具体例

- AI技術は、偽・誤情報の生成を通じて既存のリスクを増幅させることもあり、また、ディープフェイク等を含む犯罪への悪用事例も生まれており、様々な政策文書上で指摘されている状況。

偽誤情報等の流通・拡散

- 生成 AI が生み出す誤情報を鵜呑みにすることがリスクとなりうる。例えば、米国の弁護士が審理中の民事訴訟で資料作成に生成 AI を利用した結果、存在しない判例を引用したことが問題となった
- 海外では、偽画像及び偽動画を使った情報操作並びに世論工作が発生している。「国防総省付近で爆発が起きた」とする生成 AI で作られた偽画像が SNS及びインターネットで瞬く間に拡散した事例も見られた。一部の海外のメディア及び大手金融メディアを装った偽アカウントもこの情報を広げたことで、平均株価が一時 100 ドル以上下落するに至った。事件及び事故・災害等の偽情報を企業のアカウントが拡散してしまう事例も発生している

参考：総務省・経済産業省「AI 事業者ガイドライン（第1.1版）別添（付属資料）」

民主主義への悪影響

- 海外では、SNS の業務外利用者に提供した「性格診断アプリ」及びプロフィール情報をもとに収集した個人情報を使用し、個々のパーソナリティを把握し、それに働きかけることで、依頼者に有利な投票行動をするようにターゲティング広告を打つ選挙支援活動が実施された。具体的には、収集したデータをもとにして、「平均的市民よりも衝動的怒り及び陰謀論に傾きやすい集団」、「神経症とダークトライアド特性」等を分類して、自陣営に有利になる記事が大量に投稿された。
- こうした行為は個人情報を使った選挙活動への介入であり、国の根幹である民主主義をゆがめるリスクがあると指摘されている。

参考：総務省・経済産業省「AI 事業者ガイドライン（第1.1版）別添（付属資料）」

ディープフェイク

- 非常に高品質なテキスト、画像、音声、動画を生成でき、リアルで信憑性の高い偽・誤情報を作成することが可能となった。たとえば実在する人物が実際には言っていないことを本当に話しているかのような動画を簡単に作成することができる。
- 日本においても、政治・災害に関する情報に関するディープフェイク技術の悪用も報告されている。
- 性的な画像加工に悪用されるケースもあり、児童生徒が犯罪に巻き込まれる事案も報告されている。



▲警察庁啓発ポスター

総務省令和6年度版「情報通信白書」等より文部科学省において作成

サイバー攻撃への悪用

- 従来は専門的な知識や労力を要したサイバー攻撃が自動化・効率化され、誰でも容易に実行できる状況へと変化している。さらに、生成 AI を利用したサイバー攻撃は単なる技術的脅威にとどまらず、市民や企業の信頼基盤を揺るがし、制度や経済にも波及する社会技術的課題としての性質を有している。例えば、フィッシングやランサムウェア攻撃に加え、ディープフェイクを用いたなりすましや本人確認突破といった新しいサイバー攻撃の形態が登場しており、金融・行政・医療といった重要分野に直接的な影響を与えている。
- 生徒がサイバー攻撃等の犯罪に巻き込まれたケースも報告されている。

AISI「AI セーフティに関する具体的な影響の調査報告書」等より文部科学省において作成

生成AIパイロット校の実践事例に対する有識者コメントを ベースにした児童生徒の学習場面における懸念の例

観点	想定される活用の事例（イメージ）	事例に対する有識者コメント	ガイドラインの記載（p7,17等）
教育目的との整合 (Goal)	中3国語「PR文を書く」 ： AIに文章構成の並べ替えや文の修正を求め、単元で育成したい「構成を工夫する力」をAIが代替してしまっている。	<ul style="list-style-type: none"> 単元の目標や学習指導要領のねらいとAI活用の関係が十分に説明されておらず、「なぜこの学習でAIを使うのか」「どのような教科の学びにつながるのか」が読み取りにくい 	児童生徒の学びにおいては、 <u>学習指導要領に示す資質・能力の育成に寄与するか、教育活動の目的達成に効果的かを吟味する。</u>
学習者の主体性の確保 (User Ownership)	小6総合「しおり作り」 ： 児童が自分でしおりの内容を考える前に、AIにアイデアを求めている。	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒の発想・試行・表現の過程が省略されているように見える。 AIの提案を受けて何を採用し、何を採用しなかったのかなど、学習者自身の判断が読み取りにくい 	自己の判断や考えが重要であることを十分に認識させられるか、適正な評価の阻害や不正行為に繋がらないか、生成AIの出力を基に深い意味理解を促し、思考力を高める使い方をできるかなど、 <u>発達の段階や各教科等における学習の状況等を含む児童生徒の実態を踏まえ、そうした教育活動が可能であるかどうかの見極めが重要。</u>
教師による 学習活動への位置付け (Instructional Design)	小6音楽「音楽の創作」 ： AI作品と自身の作品の比較後に、児童自身の旋律を再検討・修正する活動までつながっていない	<ul style="list-style-type: none"> 単元や授業のどの場面で、どのような意図をもってAIを活用したのかが読み取りにくい。 AI活用後に、交流・比較・再検討・振り返りを通して児童生徒の考えがどう変化したのかの説明が不足している 	教育は、教師と児童生徒との人格的な触れ合いを通じて行われるものであり、 <u>適切な指導計画や学習環境の設定、丁寧な見取りと支援といった、学びの専門職としての教師の役割は、生成AIが社会インフラの一部となる時代において、より重要なものになる。</u>
AIの役割・範囲の制御 (Directed Control)	中3国語「意見文を書く」 ： AIが複数の改善点を提示し、生徒が最も伝えたい主張よりもAIの助言に沿って修正してしまっている	<ul style="list-style-type: none"> AIが学習者の思考を支援するのではなく、作業や判断を代替しているように見える。 本来児童生徒が考えるべき内容までAIが担っていないか、役割や出力範囲を調整する必要がある 	生成AIを利活用することが目的であってはならない。 <u>そのためには、適切な課題設定と指示文（プロンプト）により自らの求める成果物につながる出力をさせ、その真偽や適切性を的確に判断できることが前提</u> となる。
AI出力の吟味・検証 (Evaluation)	高1情報 I「データの分析」 ： AIが示した解決策を、データや分析の前提と照合せずに利用している活用に見える	<ul style="list-style-type: none"> AIの回答を正しいものとして受け入れ、誤り・偏り・不十分な説明に気づかないまま利用しているように見える。 「確認させた」と書いてあるだけで、何と照合し、どのように確かめたのかが読み取りにくい 	教師は、 <u>自身が十分にハルシネーションやバイアス等の生成AIの特徴を理解した上で、児童生徒がそのような生成AIの特徴に留意して利活用できているかを確認する必要がある。</u>

- 海外においては学習課題の性質や目的に即して生成AIの利活用に関する方向性を明示している例も存在。

※あくまで高等教育段階の例であることに留意。

米国・コーネル大学におけるAIとアカデミックインテグリティに関する方向性

生成AIの利用を認めない (AI-FREE)	● 本授業における 基礎的な概念および技能の習得と熟達を確実にするため、生成的人工知能 (AI) ツールの使用は禁止 する。これには、文章の再構成や編集を支援するツールも含まれる。なぜなら、自らの文章を自己評価し、執筆過程を振り返り、自身の表現を確立する能力は、書き手としての成長に不可欠であるためである。
生成AIの利用を限定的に許可する場合 (AS-UA)	● 本授業における基礎的かつ本質的な概念の習得には、努力と反復が必要である。そのため、 生成的人工知能 (AI) ツールの使用は原則として推奨されないが、一部の課題においては許可 される。各課題ごとに、生成AIの使用可否は明確に示される。
全面的に認める場合 (ANY-AI-UA)	● 本授業では、 指定された課題において生成的人工知能 (AI) ツールの使用を推奨 する。各課題の指示において、生成AIの使用可否は明確に示される。
課題ごとに判断する場合 (AS)	● 生成的人工知能 (AI) ツールの使用に関する方針は、課題ごとに個別に決定 。それぞれの課題において、その詳細とともに明確に示される。生成AI技術の進展に伴い、授業における利用方針は、AIの公正利用や本分野におけるキャリアへの影響に関する授業内の議論を踏まえて形成される可能性がある。

<https://teaching.cornell.edu/generative-artificial-intelligence/ai-academic-integrity> (2026/06/29アクセス) より文部科学省において仮訳

LSE(London School of Economics) におけるAIの活用に関するガイド

Good practice guide: communicating with students about Generative AI in formative and summative assessments

学生ができること	具体例	生成AIが作成した文章	適している授業	
Position 1: 使用不可	評価対象に生成AIを使用しない	文法確認のみ	認めない	独立した技能が中核となる授業
Position 2: 限定的に使用可	学習支援として生成AIを活用する	ブレインストーミング、文献調査	認めない	生成AIリテラシーと基礎的技能の習得を両立させたい授業
Position 3: 全面的に使用可	生成AIの活用を認めるが、仕様内容の明示を求める	たたき台作成を含むすべてのタスク	開示の下で認められる	生成AIの使用が実社会・専門職の実践に即している授業

<https://info.lse.ac.uk/staff/divisions/Eden-Centre/Artificial-Intelligence-Education-and-Assessment/Staff-FAQs-on-the-use-of-GenAI-in-teaching-learning-and-assessment> (2026/06/29アクセス) より文部科学省において仮訳

AIを使いこなす力の育成

※ 第6回情報・技術WG「AIに関する現状と課題について」の要点をまとめた資料

- **AI（生成AIを含む）を適切かつ効果的に活用し、問題を発見・解決したり、自分の考えを形成したりする力（いわゆる「AIリテラシー」）を育成するため、「AI自体を学ぶこと」と「AIを活用して学ぶこと」に整理して構造化し、発達段階に応じて体系的・系統的に取り扱う方向。**
 - ✓ 総合的な学習の時間の情報の領域（仮称）では、様々な学習場面で汎用的に求められる、AIの特性やそれを踏まえた適切な取扱い方に関する内容を精選したうえで、**AIの効果的な場面と注意が必要な場面の双方を体験的に学習する活動を扱うこととする。**
 - ✓ 情報・技術科（仮称）では、**扱う情報技術や生産技術（※）とAIが密接に関係すること**を踏まえ、教科内の各内容においてAIとの関係を関連付けながら横断的に扱うこととする。
 - ✓ 情報科では、AIとの関係を関連付けて横断的に学ぶことを前提に、情報Ⅰでは**社会におけるAIの利用者としての視点**を中心に扱い、情報ⅡではAIに関する項目を新設し、**AIの開発や提供に資する発展的な内容**を扱うこととする。
- この力は、**新教科・領域等において育成し、各教科等の学習の中で効果的に機能させることが適当。**
- さらに、**AIの出力を批判的に吟味しながら、利点を生かして活用できるようになるための方策**については、**発達段階を踏まえ、生成AIの利活用に関するガイドラインにおいても検討を進めている。**また、AIはとりわけ技術の進展が目覚ましいため、このガイドラインや教材等も活用しながら**教育内容の陳腐化を防いでいく必要。**

（※）材料と加工の技術、B生物育成の技術、Cエネルギー変換の技術

学習内容イメージ

小学校 総合 情報の領域（仮称）

- 依存のリスク等を踏まえ、**AIに頼りすぎないことや自ら適切な距離を取る必要があること**
- AIは既存のデータを基に予測・生成しており、**出力結果には誤りや偏りが含まれること**



中学校 情報・技術科（仮称）

- AIの利用には**権利侵害や悪用、誤情報等のリスク**があり、リスクを踏まえた**活用が重要**であること
- 生産技術に実装されたAIは、**現実世界の情報を捉えて働き、生活や社会で営まれる作業を自動化**すること



高等学校 情報科 情報Ⅰ（※必修科目）

- AIが**社会の情報の生成や流通**に関与することで**利便性とリスクが増幅**することを理解すること
- **自律的に動作するようなプログラムの特性を理解し、AIを含む情報システムを構成**できること



情報Ⅱ

- AIのリスクを踏まえた**人間中心の設計と評価**が不可欠であること
- AIを含む先端技術等を活用した**情報システムを構成・実装**することができること



AI自体を学ぶ

AIの適切な取扱いと特性の理解

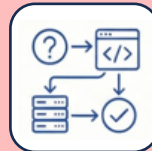
AIを活用して学ぶ

資質・能力の育成を行う観点から活用が効果的かを吟味

- AIの**基本的な仕組みや特徴を理解したり、作品制作をするために体験的に活用**



- AIを**原理や特性を踏まえて使い方を設計・判断・評価する対象として捉え、技術の学習過程を充実させるために活用**



- AIを「**多様な情報を結び付け、処理し、新たな情報を予測・生成する情報技術**」として捉え、**情報技術の科学的な理解を確かなものとし、それに基づく探究的な活動を含む学習過程を充実させるために活用**



高等教育段階 数理・データサイエンス・AI教育